

快適
田園都市
生活術



センター南 ■ 佐藤邸

木を愛する妻へ。 木マツの風合いを生かした モダンな建築家の自邸

撮影・渡邊慎一郎 取材・文・三上美絵

お客様の設計優先で
時間がない!
つくりながら考えた「わが家」

ファサードの、木製横格子のスク

リーンが異彩を放つ佐藤邸。チャイムを押すと、この家の長男・世界くん(11歳)が、螺旋階段を軽やかに駆け下りてくるのがガラス越しに見えた。玄関から飛び出して、スルスルと格子戸を開けてくれる。

ここは、宝建設専務で建築家でも

ある佐藤治正さん(40歳)の自邸である。建築家といえども、自分の家を建てるのは、一生にそう何度もすることではない。さぞかしこだわり抜いて設計なさったのだろうと思つたが、意外や、そうでもないらしい。

「この家を建てた4年前は、仕事が猛烈に忙しかったんです。お客様優先ですから、自分の家の図面は後

回しになってしまって。地下を掘つた段階で、詳細設計図がまだきていなかつたので、工事が中断してしまつたんですよ(笑)と当時を振り返る。

自邸に限つては、つくりながら考える、という自転車操業。今にしてみれば、もう少し細かくていねいにつくりたかった、と少し残念そう。それでも、住むほどに愛着が湧くのも、自らの手でつくりあげた家ならではのこと。

「主人はいつも『いい家だらう、な!』なんて言つてゐるんですよ。子どもたちは、うんうんつて流してますけど」と暴露するのは、奥様の優美さん(38歳)だ。

この家は、住居であると同時にモ~~ルーム~~ルームでもある。見学にやつてきたお客様が、中庭の格子戸や螺旋階段、造作家具を気に入り発注に

至るケースも多いのだと。

お互いが違うからこそ
おもしろい。

ユニークな夫婦のカタチ

設計にあたり、優美さんから治正さんへの唯一の注文は「建築家のデザインによくある、真っ白い家はイヤ」というもの。白という色は、お洒落な反面、ともすれば生活感が希薄になる。そこで治正さんは、家の造作家具とフローリング、天井の材料を木マツで統一。その赤味がかつたブラウンが、モダンなデザインに柔らかさと落ち着きを添えていく。

「私たち、ふだんは気が合わないんですけど(笑)、なぜかインテリアの趣味だけはぴったりなんです」と優美さん。色白で愛らしい容貌から受ける印象とは違う、気取らない口

玄関前のスペースは、ボーチ兼バティオ。背の高い格子に囲まれているので、子どもが遊ぶにも安心だ。格子が家の外壁に、ユニークな陰を落としている





上) 地下にある治正さんの寝室(下)の隣には、ワインセラーのついたホールが。中) 広々としたリビングだが、「全員がこのソファに、てんとう虫みたいにくっついて座ることが多いんです。きゅうくつなのにね(笑)」と優美さん。左・リビング中央には、オーダーした大きな座卓。床に座ると視線が低くなり、スペースに広がりが出るという

ぶりが魅力だ。その膝に甘えているのは、9歳の長女・悠美ちゃん。世界くんも寄り添って静かに本を読んでいる。かたわらで、そんな3人をやさしく見守る治正さん。

地下には小さいながらも本格的なワインセラーがあり、キッチンにはハイチエアのバーカウンターもついている。ひょっとして、おふたりはかなりイケるくちなのでは?

「二人ともワインは好きですね。で

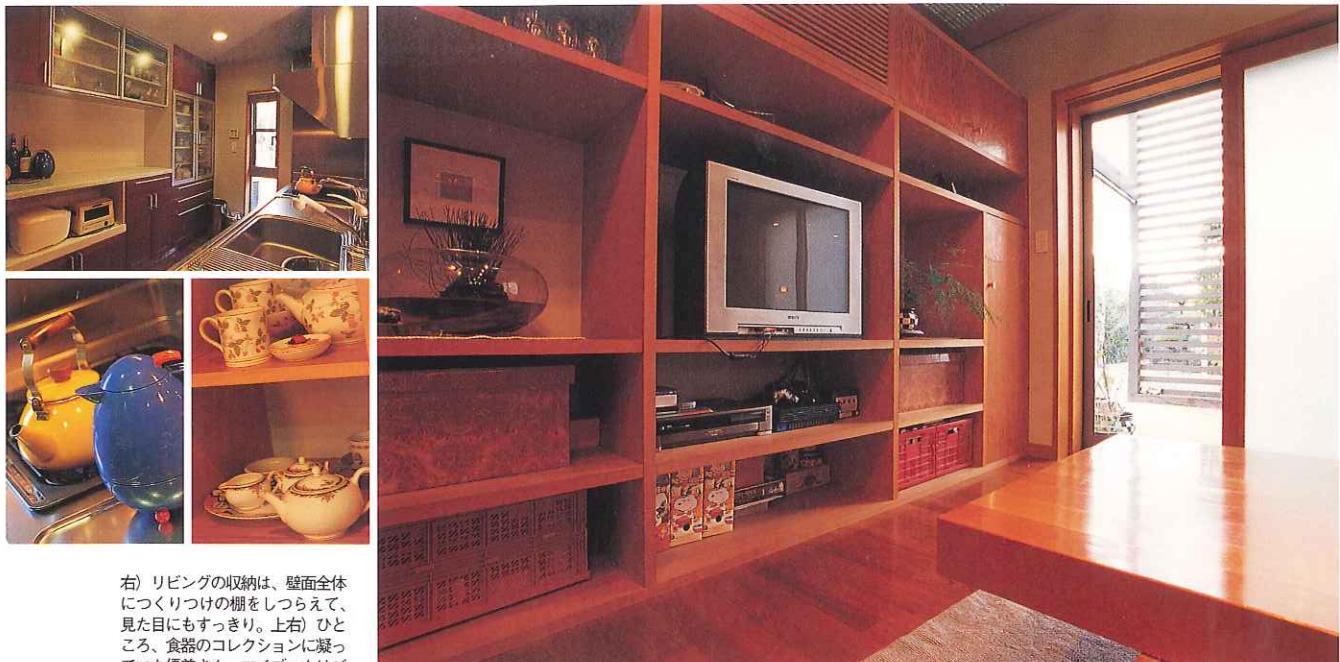
も、私はボルドーのポイヤック一辺倒で、冒険はしない主義。彼は飲んだことのない新しいワインを試すのが好きなんです。夫婦でも、好みの違いって、おもしろいものですよね」。優美さんの言葉には、お互いの個性を尊重しあう、媚びない姿勢が感じられる。

特別な日ではなくとも、くつろぎの夜のひととき、ご夫婦どちらかがワインを抜く。すると、いつの間にか相手がそばへ来て、一緒にグラスを傾けている……そんな自由なスタイルが、佐藤家流のワインの楽しみ方なのだ。

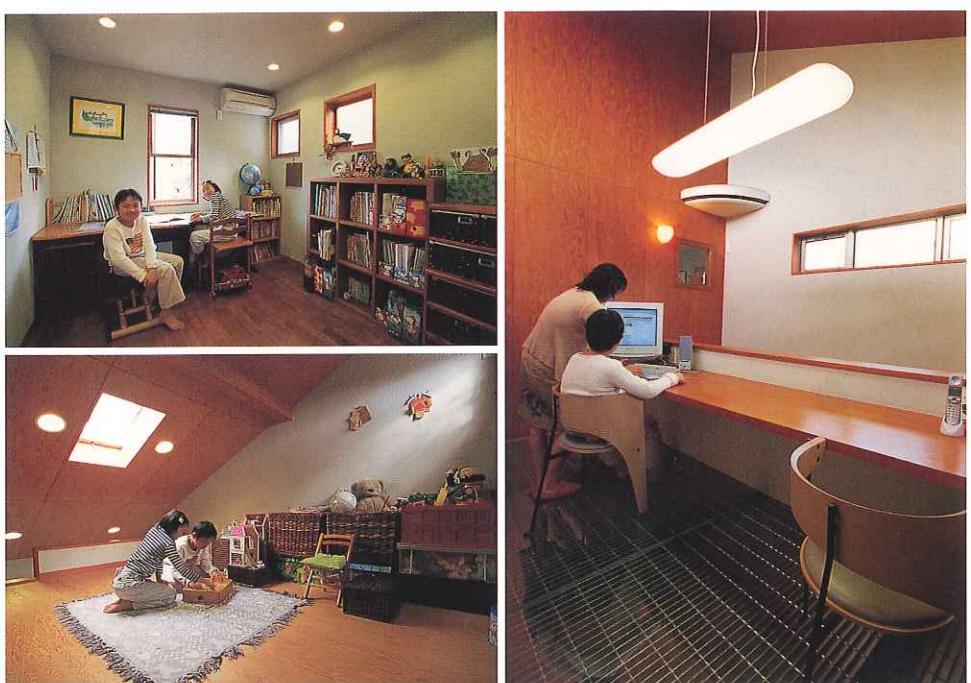
おしゃれな

『ガーデニング』より 泥まみれの『園芸』が好き

佐藤家のリビングには、10人はラクに座れるほど大きい、無垢の木の座卓が置かれている。ほかにも造作家具やチークのフローリング、木の格子戸、青森ヒバのお風呂……よく見ると、そこかしこに、木材が



右) リビングの収納は、壁面全体につくりつけの棚をしつらえて、見た目にもすっきり。上右) ひとつこ、食器のコレクションに凝つていた優美さん。マイブームはカラーヘンドー和食器と移り変わったとか



右) リビングは吹き抜けになっており、2階部分には細長いパソコンルームがある。左上) 中学受験を控えた世界くんの部屋は、落ち着いて勉強ができる環境だ。左下) 美悠ちゃんの部屋にはロフトがついている。
お問い合わせ: 宝建設 ☎ 044-877-3861 <http://www.takara-kensetsu.com>

快適
田園都市
生活術
4

心地がいい」と優美さんが感じるのも、この家に、木材が多用されていることと関係があるのかもしれない。だがそれは、とくに要望したことではなかった。どういう家をつくれば、家族にとって一番安らげる場所になるか……。言葉を労して語らずとも、それがわかりあえるところに、ご夫婦の絆を感じた。

「家の中のどこにいても、本当に居心地がいい」と優美さんが感じるのは、この家に、木材が多用されていることと関係があるのかもしれない。だがそれは、とくに要望したことではなかった。どういう家をつくれば、家族にとって一番安らげる場所になるか……。言葉を労して語らずとも、

効率的に使われていることに気づく。じつは、優美さんが愛してやまないのが、木なのである。金沢区の自然ゆたかな環境で育ち、子どものころから木や緑が好きだったという。中庭には、玄関前のサルスベリはじめ、オリーブ、山モモ、山モミジといった木々が、のびのびと育っている。春と秋の手入れの時期には、ご家族から「お母さんは、庭へ出ると帰つてこない」と、ちょっとしたブーリングが起ることもある……。

「趣味を聞かれれば、『園芸』と答えますね。ハーブやお花をいじるこれいなガーデニングじゃなくて、園芸。泥まみれになつて木の世話をするのが性に合っているんです」。

夏休みにはよく、子どもたちを連れて屋久島へ。「ひと月に40日雨が降る」といわれる屋久島で、濡れた屋久杉の木肌の美しさ苔のみずみずしさを堪能し、カヌーに乗り、山歩き滝を見に行く旅。今は世界くんの受験を控えて旅行はお預けだが、いざれまた屋久島を訪れたい、というものが家族の願いだ。

それがわかりあえるところに、ご夫婦の絆を感じた。